

アウトプット

2020.12.25

以前、「三上（さんじょう）」という言葉を紹介した。北宋の政治家であり文章家でもある欧陽脩の「帰田録」に、「余、平生作る所の文章、多くは三上に在り。すなわち馬上・枕上（ちんじょう）・厠上（しじょう）なり」とある。

どういうことかということ、文章を考えるのに最も適している、都合がいいという3つの場面・場所が、「馬に乗っているとき」「寝床に入っているとき」「トイレに入っているとき」だというのである。さすがに、現代では日常的に馬に乗ることはないので、私はこれを「車を運転しているとき」に置き換えている。

私の場合は、この三上（さんじょう）が、ぴったり当てはまる。中でも、一番困るのが「枕上」である。人が寝ようとしているときに、次から次へと文章が湧き出てしまう。この「校長室だより」もそうである。なかなか眠れなくなる。

それが、いつの頃からか、就寝時でも文章が出なくなった。同時に、校長室だよりの原稿作成にも支障を来すようになった。書きたいことをどんどん書くという段階から、絞り出すように書くという段階へと移行した時期があった。私にしてみれば、危機と言える時期が二度ほどあった。

すると、この段階を自然と脱することができた。書きたくて仕方がないものがあるわけではない。枕元で文章が浮かんでくるわけでもない。それでも、書こうと思えば、文章が出てくる段階へと進んだ。おかげで、眠られなくて困ることもないし、書くことがなくて苦しむこともなくなった。今は、自然体で毎日書いている。本や雑誌を読み、ぜひ皆さんに紹介したいものがあれば、それを載せ、そこから自分なりに考えるようにしている。

以前は、インプットしないとアウトプットができなくなると思い、本を読んだり、雑誌に目を通したりしていた。これはこれで役に立ったのだが、今はインプットしなくても、アウトプットできるようになった。気がつくと、自分の教員人生を振り返っていたりするが、書きながら考え、考えながら書くという行為は、自分のために役に立つ。自己研鑽である。

徒然なるままに書く兼好法師ではないが、さほどの計画性もなく、その日暮らしのように書いていくのもわるくない。おかげで毎日、話題があちこちに飛ぶ。読んでいただいている皆さんからしたら、一貫性がなく読みづらいかもかもしれないが。

何気なく読んでいる雑誌の内容も、読んで終わりではなく、この校長室だよりに取り上げることで、さらに考えを深めることができる。書く機会が増えたせいか、以前よりも世の中のことに對してじっくり考えるようになった気がする。少しは、世の中のことが分かってきたと言えるかもしれない。いや、考え方が分かってきたと言ったほうが正しいように思う。

今までは、いったい何をしていたのかと自分に言いたくなる。勉強不足であった。勉強に終わりにはない。これからも日々勉強である。勉強しながらアウトプットを続ける。何事も続けることが大切である。